

合、こうした視點から、逆に道教の持つ民族性を照射することも必要ではなからうか。

四

以上思いつくままに、福永氏の大著への拙い感想を書き綴ってきた。本書は十六篇の論文により構成されるが、道教への思索が進展するに伴い、著者の内部には力點の移行や所説の變更が生じたらしく、相互の論述の間にはかなりの矛盾や齟齬が見受けられる。本書を完成させるに際し、最終的理解の線に揃える形で修改を加え、一書としての整合性を維持して欲しかった氣がする。また、すでに批判を受けた先行の諸説に觸れぬ姿勢に關しても、そのままの體裁を繼承されているが、この點に對する著者の見解も、是非提示して頂きたかったところである。

上述の如く、著者が本書に明示された道教研究の姿勢や、獨自の方法論に對し、筆者は深く敬意を表するものである。しかしその一方で、著者が説く道教形成史の骨格に對しては、首肯し難い面が多々存することも事實である。もとより『道藏』を通讀したことすらない山外の俗人の批評に過ぎぬから、著者の深遠な意圖を讀み取れなかったが故の誤りも數多いことであらう。ひたすら跪拜叩頭して、天師・眞人の御寛容を乞う次第である。

一九八七年九月 東京 岩波書店

A 5 判 五〇七頁 七八〇〇圓

岡崎敬著

中國の考古學——隋唐篇——

愛宕 元

本書は、著者の三十年來に亙る幅広い研究活動のうち、隋唐時代に關する諸論考を中心にまとめられて一冊とされたものである。全て四部から成り、第一部「隋唐考古學の諸問題」は、解放後比較的古早い時期の隋唐時代に關する中國考古學上の成果を紹介しつつ、幾つかの斬新な知見を提示された十篇から成り、評者にとつて最も興味深く、同時にかなり手厳しいことを申し述べさせていただいた篇でもある。第二部「中國文化とその周邊」は、東北アジア及びモンゴリア方面に關する六篇の論考がまとめられている。第三部「日中交流の考古學」は、「唐代壁畫墓からみた高松塚古墳について」及び「福岡市(博多)聖福寺發見の遺物について」の二篇を除き、他の四篇は、圖録解題や全集月報などの一般向けの解説書を收録されたものである。第四部「隋唐の文化と陶磁」は、唐代を中心に、前後の隋代や五代期に及ぶ陶磁器を論じた二論考から成る。本書にまとめるに當つて、著者は執筆後に出た關連する發掘報告の類を新たにいくつか注記、ないし表の増補として加えられ、本書刊行時における中國考古學上の豊富な情報著積に配慮されている。以下にもつぱら第一部を對象とした紹介と評を記すことにしたい。

第一部第一章「洛陽考古見聞記」は、一九七四年における著者の

龍門石窟、洛陽市博物館、含嘉倉城遺址、考古研究所洛陽工作站などでの見聞記である。ここでは洛陽市博で唐墓出土の三角縁畫像鏡に注目し、日本で出土した類似的鏡と對照されているのは、さすがに鋭い觀察眼と言えよう。洛陽博藏の鏡と日本出土の鏡二面の銘文の比較から、日本出土のこの種の鏡を中國製と見なされる。その他、北魏の永寧寺址や唐の含嘉倉城にも言及されているが、簡単な紹介の域を出ない。第二章「隋・大興城―唐・長安城と隋唐・洛陽城」は、一九六三年に執筆されたものであるが、その後の發掘成果をいくつか加えて補訂、加筆されている。例えば長安城・洛陽城の復原平面圖などは、その後のより精度の高いものに差し換えられている。本章で注目すべきは、長安城のきわめてシンメトリックな平面プランに對し、洛陽城のそれが何故にかくも變形したものであるのか、すなわち、宮城・皇城部が西北に偏置されているのかについて、一つの見方を提示されている點である。發掘調査に基づいて復原された洛陽城の宮城正北門の玄武門、宮城正南門の應天門、皇城正南門の端門、南城定鼎門を結ぶ南北線が邙山（但し邙山上のどの地點であるかは問題として残るが）と龍門伊闕を結ぶ線上にはば完全に合致することに着目され、本來は長安城と同じく、宮城・皇城を城内正北面に配した左右對稱のプランであったと想定されるのである。近年、日本古代史學界において、我が國の都城のモデルを中國のいずれの時代の都城に求めるかの論議が盛んであり、北魏洛陽城、東魏北齊鄭城、そして隋唐長安城・洛陽城などの都城としてのプランが注目を集めている。本論考が發表された時點では、比較的早い時期での長安城・洛陽城の考古學的成果の紹介ということで評價されるべきであろう。洛陽城の發掘成果を踏まえての最も早い我

が國での復原研究には、平岡武夫編『長安と洛陽―唐代研究のしおり第七―』（一九五四 京大人文研）がある（長安城に關する最初の發掘報告は『考古學報』一九五八―三所載の陝西省文物管理委員會「唐長安城地基初步探測」であり、前掲書出版時には未だ利用できなかった）。本書では、その後の中國での研究を吸収して洛陽城内の坊と市場の區劃をも紹介されている（但し、『考古』一九七八―六所掲の插圖の差し換えのみ）。平岡前掲書は發行部數が少なく（一九七七年に再版出版）、しかるべき研究機關以外で目にすることは困難であった。さらに『考古通訊』や『考古學報』といった發掘報告を掲載した中國の學術誌は、一九五〇年代から六〇年初めにおいては、國內でバックナンバーを揃えている所はまれであった。本論考は『佛教藝術』誌に發表されたもので、廣く一般の目に觸れる場での紹介ということでは有意義であったと言える。近年の中國における考古學上の成果は質量ともにきわめて豊富であり、隋唐期の長安や洛陽に關しても例外ではない。本書に再録されるに當り、本文で長安の青龍寺址と洛陽の含嘉倉城の發掘成果を、また注においても新成果をいくつか補ってはおられるが、必ずしも十分とは言えないように思えるのは評者のみではあるまい。例えば、「宮城および皇城の部分、市街の下に没し、充分な調査が行われないのは残念である」（三三頁）という状態であったが、最近になって長安城皇城南門の一である含光門が確認されるなど、いくつかの注目すべき事實が知られつつある。本書刊行後の主要な發掘報告を參考までに記しておこう。

馬得志「唐長安城發掘新收穫」（『考古』一九八七―四）。大明宮城のいくつかの建築遺構の確認、含光門遺址の發掘、青龍寺伽藍

配置の全體プラン及び西明寺の發掘。

中國社會科學院考古研究所西安唐城工作隊「唐長安皇城含光門遺址發掘簡報」（『考古』一九八七・五）。

趙超「唐代洛陽城坊補考」（『考古』一九八七・九）。洛陽城內坊數が、一〇九坊ではなく、一一三坊以上であることを墓誌銘を利用して明らかにした。但し、唐代を通じての置廢を含んだ延べ數である。

中國社會科學院考古研究所洛陽唐城隊「唐東都武則天明堂遺址發掘簡報」（『考古』一九八八・三）。洛陽での宮殿規模の建築遺址としては最初の發見で、王莽が建設した漢代長安明堂址との比較など、今後の調査が待たれる。

本論考は初出時において誤記が少なからず見られたが、本書への再録に際して全く正されていないのはいかげなものか。長安城が唐末の韓建による縮小再建により「奉元城と呼ばれた」、あるいは洛陽宮城を「紫微城」と繰り返し記すなどは、ごく一例に過ぎない。

第三章「南京・老虎山における東晉、顏氏の墳墓——『顏氏家訓』

終制第二十、解——」は、五〇年代末に南京北郊で發見された東晉期の四基の顏氏墓を手掛りに、非常に出土例の少ない南朝墓にまで視野を広げての考察である。出土した墓誌塋、石印、銅印等から復原された家系が、顏之推、師古、眞卿らの祖であることを紹介し、顏之推の遺言とも言うべき『家訓』の終制篇で強調される薄葬と、今回發見された四基の顏氏墓がともに簡素な副葬品からなっている點を關連附けられる。顏氏という儒姓寒族の南渡後まもない時期の姿の一端を示すものであり、顏之推が南朝から北朝へと流轉の生涯を送ったことと對比されるのは興味深い着眼ではある。ただ約二五

〇年の時代差、つまり南朝初期と最末期の歴史的過程を無視して直截的に結びつけられることには、いささか疑念を覚えざるを得ない。本篇も誤記が少なくない。特に「北方からの流寓貴族の中には琅邪の王氏・太原の荀氏・鄆陵の瘦氏……宛句の下氏などがあつた」（六四頁）とあるのを見れば、六朝史專家でなくとも誤りに氣附こう。言うまでもなく「琅邪の王氏・太原の王氏・潁川の荀氏・鄆陵の庾氏……宛句の下氏」でなければならぬ。誤記以上に、本篇にはかなり重大な事實誤認があるので指摘しておかねばならない。「吳代・東晉をふくむ晉代には石製の墓誌が全く知られていない」（六四頁）、「このように、現在知られている資料からみて南朝の石製墓誌は、宋代にはじまる」（六七頁）とされ、東晉期までは全て墓誌は塋製であつたと結論されている點である。新出の南朝墓誌は、現時點でも約二〇點ばかりときわめて少なく、それらは石製と塋製とがほぼ相半ばするが、東晉期の石製墓誌が三點知られているのである。太寧元年（三三三）卒の謝鯤墓誌（『文物』一九六五・一六）、同三年（三三五）卒の張鎮墓誌（『文博通訊』一九七九・一〇）、咸康六年（三四〇）卒の王興之墓誌（『文物』一九六五・一六）はともに石製墓誌である。本篇が發表された一九六四年以後に知られたものばかりではあるが、再録に際して補訂された「南京近郊の東晉墓」表には謝鯤墓誌、王興之（王興之と誤記）墓誌が加えられているのであるから（張鎮墓誌は本表には缺落）、當然、本文記述を改訂されるべきであつた。また「吳代より西晉にかけて、かまど・井戸……などを陶製の明器として作ることが少なくなかつた」（六四頁）とあるのも、はなはだ不正確な記述である。すでに後漢墓から大量のこの種の明器は出土しているし、近年では前漢墓から

の出土例もかなりの數にのぼる。林巳奈夫『漢代の文物』(一九七六
京大人文研)はこれら多數の出土明器の圖版を附し、それらの本
來の用途別に分類考證した精緻な研究であり、参照されたい。また
劉宋期になってようやく石製墓誌が出現するとして、大明八年(四
六四)卒の劉懷民墓誌を紹介して、「今日、宋代の出土したものとし
ては唯一の遺存例である」(六六頁)とされるのには、二重の誤
りがある。第一に本墓誌は近年の出土ではなく、清代に見附かった
ものであること(『魏晉南北朝墓誌集釋』一他)、第二に劉宋期の墓
誌の新出例は、永初三年(四二二)卒の司馬德文墓誌(『考古』一
九六一一五)及び元徽二年(四七三)卒の明覺憺墓誌(『考古』一
九七六一)の二例が知られているのである。六一年の司馬德文墓
誌は本篇執筆時點で既知であつたはずのものであり、七六年の明覺
憺墓誌は再録時に補われるべきであつた。既述の如く、現時點でも
新出の南朝墓誌は約二〇例ときわめて少ないが、貴重な第一次資料
としての利用價值は高い。但し、これら出土墓誌を個々のものとし
て扱うだけでなく、総合的な資料價值についての理解が求められよ
う。このような視點から、これら新出南朝墓誌が歴史史料として活
用されているものに、中村圭爾氏の諸論考がある(『六朝貴族制研
究』所收 一九八一 風間書房。参照されたい)。

第四章「隋趙國公獨孤羅の墓誌銘の考證」陝西省咸陽底張灣の北
周・隋唐墓」は、一九五三年に發掘された獨孤信、羅、開遠三代
の墓に關する論考である。六一年の本篇發表時點では、獨孤羅の墓
誌のみ内容が知られていた。その後、七四年にあらためて羅の墓誌
に關する情報が得られ(『考古』一九七四一四)、また開遠の墓誌は
近年になってようやくその内容が判明したのである(『文博』一九

八四一、同一九八四一三)。ただ不可解なのは、西魏八柱國で、
女三人が北周・隋・唐三代の皇后(唐高祖李淵の母獨孤氏元貞皇后
は追贈)となつた信の墓誌が今もって公表されぬことである。著者
は陝西省博物館で信墓誌を實見され、「周之元季(季の誤り)三
月」との紀年部分をメモしたと言われるが、確かであろうか。近年
刊行された陝西省博物館編『西安碑林書法藝術』(一九八三 陝西
人民美術出版社 三八五頁)には、「西安碑林藏石細目」として、
同博藏の八六九點に上る詳細な墓誌目録を附すが、獨孤信墓誌は著
録されていない。五三年に獨孤信墓誌が實際に出土したのであれ
ば、その公表が望まれる。さて本篇では獨孤羅墓誌の全文が紹介さ
れている。北魏以降の墓誌では、ほぼ四句六句の對句的表現を多用
した定型化された文章から成るため、意味はともかくとして、句讀
は比較的容易に切ることが出來、本墓誌もその例外ではないが、
句讀の切り方がきわめて不正確である。また墓誌等石刻では獨特の
字形を頻用することも珍らしいことではない。例えば「年」字はし
ばしば「季」字が用いられ、本墓誌でも八ヵ所に用いられている
が、全て「季」字に誤記されている。その他、數ヵ所で「拓跋」と
あるべきを、全て「拓拔」と記されたままであるなど、誤記がはな
はだ多いのは遺憾である。なお本篇には中國内で出土した東ローマ
金貨、ササン朝銀貨、イスラム初期銀貨等を、出土地と發見年、貨
幣の種類、發掘報告掲載誌を網羅した詳細な表が附せられている。
本篇初出時の六一年以後、本書刊行の八五年までの新出例をも丹念
に拾ひ、二九地點の五七道跡からの一二〇〇枚餘りから成る、楊泓
「與中外交通有關的遺物的發現和研究」(『新中國的考古發現和研
究』所收 一九八二)は、中國學者による新出外國貨幣に關する最

近のまとまったものであるが、七七年までしか言及されておらず、本篇の附表の方がはるかに充實した情報を提供してくれる。

第五章「唐、張九齡の墳墓とその墓誌銘―廣東省韶關市近郊の唐代壁畫墓―」は、五八年發見の張九齡墓出土の墓誌の紹介を中心に、西安周邊で既發掘のいくつかの唐代壁畫墓との比較を試みた論考である。西安近郊の壁畫墓に共通した構造上の特徴と壁畫の様式を五點指摘し、はるか南方の僻地廣東出土の張九齡墓もほぼそれらと同じ形式の墓制であるとされる。なお、張九齡と高力士の關連から、高氏一族の墓にも言及され、五四年に發見された高力士の實父馮潘州（正しくは馮衡）墓誌、及び清代出土の義父高延福碑にともに「長樂原に葬る」とあることから、高氏一族墓は長樂原にあったと推定される。長樂原とは長安城至近の東郊に位置するこの地方特有の黃土臺地狀の「某原」と稱せられる地の中で、ここには行政區劃としての長樂郷が置かれ、墓葬域として唐代人士に好んで造墓された地である（拙稿『唐代兩京郷里村考』、『東洋史研究』四〇―三、一九八一參照）。しかし、未公表ではあるが、高力士墓は、ここから西北約一〇〇キロの現蒲城縣（唐代の奉先縣）にある睿宗橋陵附近で最近發見されたと聞く。本篇でも八三年までの考古學上の成果を補って、唐代壁畫墓二九例の造營年次順に配列された一覽表が附されており、唐代美術史、繪畫史研究者にとっても有益であろう。ただ、壁畫を主題とした論考であるだけに、望むらくは壁畫寫眞か模寫をもう少し多く挿入されていただけという思いがする。本表中にも誤記がいくつかあるので注意を要する。本表に掲げられた諸墓の多くは、その後に續報が出ているので補っておきたい。

(7) 李壽墓（昭陵陪家とあるのは、獻陵陪家の誤り）『考古學報』

一九七六―二、『文物資料叢刊』三、『考古』一九八三―一、『考古與文物』一九八五―五。

(9) 執失奉節墓（出土地郭杜鎮は、郭杜鎮の誤り）『文博』一九八四―一、同一九八四―三。

(10) 鄭仁泰墓 『文物』一九七五―一、同一九八〇―七、『考古學報』一九七六―二、『考古』一九八一―三、同一九八二―四、『考古與文物』一九八三―五、『文物資料叢刊』六。

(11) 李爽墓（官銜を守司形太常伯と記すが、守司列太常伯の誤り）『考古學報』一九七六―二、『文博』一九八四―二。

(12) 阿史那忠墓 『文博』一九八四―一。

(13) 李鳳墓 『文物資料叢刊』六、『考古與文物』一九八三―一、同一九八三―五。

(13) 懿德太子墓 『考古學報』一九七六―二、『文物資料叢刊』六。

(16) 永泰公主墓 『考古學報』一九七六―二、同一九八二―二、『文物資料叢刊』六、『文物』一九八三―一〇、『文博』一九八四―二、同一九八四―三。

(17) 韋洞墓（韋洞は韋洞の、出土地長安縣南里王村は李王村の誤記）『考古與文物』一九八三―五、『文博』一九八四―二。

(18) 萬泉公主薛氏墓 『文博』一九八四―二。

(19) 章懷太子墓 『考古學報』一九八二―二、『考古與文物』一九八三―一、同一九八四―二。

(20) 薛莫及妻史氏墓 『文物參考資料』一九五六―一一、同一九五七―九、『考古學報』一九六三―一二（これらは續報ではなく、缺落を補った）。

(21) 馮潘州墓（正しくは馮衡と記すべき）『文博』一九八四―二、

同一九八四—三。

②雷府君夫人宋氏墓 『考古學報』一九七六—二、『文博』一九八四—二。

③高元珪墓 『文物參考資料』一九五五（これも出典脱落を補ったもの）、『文博』一九八四—二、同一九八四—三。

④高克從墓 『文博』一九八四—三。

本篇でも誤記、脱字、誤讀が目につく。『全唐文』卷二二二の「萬泉公主薛氏神道碑」を引用し、「この神道碑の銘によると薛氏は諱は字、河東汾陰の人で云々」（二二二頁）と記される。原文は「縣主諱字姓薛氏」であり、「諱」と「字」のそれぞれ次に空格であるべきところを、刻本で續けてしまっているだけのことで、「諱某字某」の意であることは言うまでもない。さらに細い点になるが、『全唐文』卷二二二とあるのは卷二一九の誤記であるとともに、『全唐文』からの引用ではなく、當然『文苑英華』卷九三三等から引用されるべきであろうし、引用部分は神道碑の銘ではなく序の部分である。また本篇でも他の篇と同様に官銜としての官爵の表記が極めて不正確である。例えば「刑部尚書尹蕭炆」（一三〇頁、二五八頁）と表記され、卷末索引でもイ行に尹蕭炆として配列されているが、正しくは「刑部尚書兼京兆尹蕭炆」である。

第六章「唐昭陵碑林目録」に掲げられた太宗昭陵陪家のうち被葬者が比定された五七基の一覽表は、『文物』一九七七一〇所載の轉載であるが、誤りがいくつも見える。例えば原載で「弘文館學士」とあるべきを「宏文館學士」と清代の避諱のまま記されているのを、そのまま踏襲されているなどは、當然のことながら正しく表記すべきであろう。昭陵博物館は、漢武帝の茂陵博等と同じく陪家

墓群からの出土文物を展示するために設けられた現地博の一種である。東西二棟、各棟三室の計六室から成り、本篇末に各室毎の陳列碑類のリストが掲載され、讀者への便がはかられている。これは著者が現地を訪問された際にとられたメモに基づくもので、本書の他所でも同様に詳細な參觀時のメモに據った記述が見える。現地でも十分な時間的餘裕がないなかで、丹念にメモをとられている姿勢には敬意を表せざるを得ない。なお昭陵陪家に關して、最近、六宮人墓が發掘されたことが、昭陵博孫東立氏の「昭陵發現陪葬宮人墓」、『文物』一九八七一〇）によつて知れ、未公表ではあるが、程知節墓が八六年四月に、太宗第五女長樂公主墓がやはり同年秋より發掘調査が開始されたと言われる。

第七章「敦煌の五涼王國時代・唐代の古墳について」は、敦煌附近で發見された魏晉期から隋唐期までの墳墓に關する發掘報告に基づく紹介である。

第八章「中國古代におけるかまどについて——釜甑形式より鍋形式への變遷を中心として——」は、一九五六年度の『東洋史研究』一四—一・二合併號に掲載された論考の再録である。漢墓から唐墓に至る出土副葬明器と文獻とをつき合せて、日常生活の具體相としての炊さん器具の變遷をあと附けたものである。漢代での穀類を蒸す土製釜甑から、唐代における直接に煮たきでできる金屬製の鍋へと、主要炊事用品の變化を追跡し、粒食から粉食への食生活上の變化と穀類加工の歴史を關連づけて論じられる。「物」に對する鋭い觀察眼をもつ著者ならではの力作である。五五年の執筆時においては、『考古通訊』と『文物參考資料』二誌のみが中國での出土文物の情報源であり、今日に較べて、その情報量もはるかに少なかったことは、

時代的制約としてやむを得ぬことであろう。その後の明器類の出土例が著しく蓄積されたことにより、本篇は一部修正が必要と思われる。すなわち、漢代においても、直接火にかけて用いる炊器としての「盆」、温器としての「鉢」が出土しており、とくに後者は銅製である（林前掲書参照）。既述の如く、本篇は出土文物と文献史料とを對比させた文献考古学的手法による好篇であるが、文献の引用が杜撰であるのが惜まれる。

第九章「鑑眞の歩いた道——揚州・西安・海南島——」は、新聞掲載の短篇、第十章「浙江南部・福建紀行」は、表題通りの紀行文である。

第Ⅱ部第一章「晩年の鳥居龍藏とその業績——中國東北考古學——」は、東北考古学の草分け鳥居博士の業績に関する解説で、全集刊行時に解題として書かれたものである。

第二章「内蒙古考古學割記」には、内蒙關係の主要遺跡分布圖、古城址調査報告の一覽が附され、七〇年代までのものではあるが、参考になる。本篇中に、遼の聖宗、北宋年號紹聖とあるべき所を、經（経）宗、紹經（経）と表記されているが、簡體字の誤讀である。また元の集寧路古城址より「己酉」と墨書した漆器が出土したことに關して、「己酉は一三〇九年で、元の世宗（祖の誤り）が南宋をほろぼし、中國を統一した年である」（二三三頁）、「己酉というのは元が中國を統一した後の至大二年にあたり」（二三四頁）などと記されるのは、言うまでもなく全く事實とは異なる。實はこの記述は『文物』一九七九—八〇所載論文の完全な誤譯によるものである。

第三章「中國東北考古學の旅」は、新聞掲載の短篇ではあるが、

八〇年前半までを含んだ東北三省における新石器以降の主要遺跡一〇三箇所の一覽表が增補されている。

第四章「中國東北考古學割記——渤海王國と高句麗王國——」は、本書刊行に際して書き下されたものである。渤海に關して、七八年に發見された、唐から渤海へ使した張建章の墓誌の紹介が主題とされており、墓誌及び蓋の鮮明な寫眞が掲げられているにもかかわらず、本文中での釋文に誤りが少なくない。高句麗に關しては、「集安考古學文獻目錄」として日・中・朝の六〇篇の參考文獻が掲げられており、關係者には有益であろう。

第五章「シベリア發見の唐鏡について」は、イェニセイ川中流域出土の唐鏡を、唐とキルギスとの關係から論じたもの。

第六章「西夏カラホト古城と元青花について」は、カラホト古城の發掘成果の紹介である。

第Ⅲ部「日中交流の考古學」は、篇目だけを紹介しておく。

第一章「宗像・沖ノ島」（一九七七）

第二章「唐代壁畫墓からみた高松塚古墳について」（一九七二）

第三章「新安海底文物について」（一九七七）

第四章「所謂蒙古碇石の發見」（一九六九？）

第五章「元管軍總把印の發見」（一九八一）

第六章「福岡市（博多）聖福寺發見の遺物について——大陸船載の陶磁と銀錠——」（一九六八）

第六章に附された唐・宋・金・元・明代にわたる各種金銀錠二〇一例（内二五例は増補）の一覽表は、出土地、材質、形状、寸法、重量、銘まで含む詳細なものである。

第Ⅳ部「隋唐の文化と陶磁」第一章「近年出土の唐三彩について

「唐・新羅と奈良時代の日本」では、唐三彩の日本での出土例一二と韓國での一例が紹介され、中國の近出二七例と比較検討される。そして唐三彩の完成期を六九〇年代に求められる。新出材料に基づいての議論だけにそれなりの説得力をもつが、初唐期の出土例がもう少し蓄積された時點での再検討が必要ではないかと思われる。

第二章「隋唐の文化と陶磁」は、隋唐帝國と東アジア、南海、西域との文化交流を物を視點にすえて論じたもの。誤記が少なくないが、事實誤認を指摘しておかねばならない。ササン朝の滅亡に際し、王子ペーローズ以下多數のペルシア人が中國に亡命してくるが、彼等によって「多くの銀がもたらされたことが想定される」（四〇四頁）というのは全く根據がない。そして「このころより中國でも銀錠、銀錠などが新たに貨幣として登場し」たのではない。銀錠は税銀、進奉、下賜贈與等の目的でもっぱら用いられたのであって、嚴密な意味での貨幣概念には含まれない。ササン朝の銀貨を「銀錢」と呼ぶのも不適切であろう。また有名な西安南郊何家村から出土した多數の窖藏金銀器中に「金、銀の開元通寶」が含まれていたとされるのは誤りであり、銀器の一が「天馬の浮彫のある革袋形銀壺」とされるのも、そのモチーフは天馬ではなく、玄宗が調教せしめた有名な舞馬である。本篇末に年代の判明する主要唐墓一〇一例の一覽表が附され、唐代史研究者にとって有益であるが、かなり遺漏があるのは残念である。全時代の、しかも墓誌を含めたあらゆる石刻資料を網羅した目録として、氣賀澤保規氏の「中國新出石刻關係資料目録(1)(2)(3)」（『書論』一八・二〇・二二、一九八一・八二・八六）があり、参照されたい。

以上で本書の紹介を終えるが、いささか細部の瑕疵のみをあげつらったとの非難を受けるのではないかと恐れる。評者のような文獻史學者の通弊として御容赦いただければ幸いである。

本書の最大の特色は、五〇年代から六〇年代前半に發表された諸論考に示されていると言える。つまり、きわめて限られた中國考古學に關する成果を基に、文獻史料とつき合せることによって一定の肉付けを與えられた點にある。現在でこそ、我々は、容易に入手し得る各種學術誌その他から、豊富に最近の情報を知ることが出来るが、五〇年代から六〇年初めの時期における著者の情報収集のための御苦勞は大變なものであったろうと思われる。現地に行き、しかるべき所では限られた時間のなかで懸命に陳列・展覽物のメモをおとりになったのも、恐らくは若かりし時期のこのような経験が背景となっているのではなからうか。これら現地での丹念なメモ類が本書所收の諸篇中に有効に利用されているのである。また諸論考を本書に再録されるに當り、その後の發掘報告類をかなり補充するという努力をおしまれていないことも、あらためて記しておかねばならない。近年の中國考古學上の成果は目を見はるものがあり、質的量的に陸續として蓄積例を増しつつある。したがって、特定の新出文物のみに目を奪われて早急な結論を下すことはきわめて危険である。出土文物の蓄積を十分に踏まえた上での系統的理解、総合的把握が求められるだけでなく、文獻の裏付けによる文獻考古學的手法がますます重要性を増していると言えよう。本書所收の初期論考は、そのような姿勢を先驅的に示されたものと言えよう。

一九八七年六月 京都 同朋舎
B5判 四七八頁 一二〇〇〇圓